

グローバル定義にもとづく スクールソーシャルワーク入門

スクールソーシャルワーカーをめざす
高校生・大学生のみなさんへ

佐野 治

もくじ

はじめに	1
第1章 スクールソーシャルワーク実践の基本的な考え方	10
第2章 スクールソーシャルワーカーに求められるもの	16
第3章 グレーゾーンの「傾向」	32
第4章 「傾向」への理解と対応	49
第5章 新たな学校生活	70
第6章 グローバル定義に沿ったスクールソーシャルワークの役割	74

第7章	スクールソーシャルワーカーの今後のあり方（私案）	81
	―国際協力オンライン交流授業の提案	
最終章	わが国におけるスクールソーシャルワーカーの今後と課題	90
おわりに		94

はじめに

★本書は、将来スクールソーシャルワーカーを志している高校生、大学生の学生さんに向けて書かれています。

★日本では「学校に通えない児童・生徒（小中高）」が18万人、一方、世界では貧困によって「学校に通えない子ども（5〜17歳）」は、3億300万人います（ユニセフ…2018年）。

★「教育を受ける機会」また「子どもの貧困（生存権）」という人権問題に関しては共通しています。

★スクールソーシャルワーカーは、先進国と開発途上国、この両国の子どもたちに、学校を拠点に、「社会変革と社会開発、社会的結束、およびエンパワメントと解放を促進」していきます。（国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）・国際ソーシャルワーク学校連盟（ASSW）「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」…2014年）

★「開発途上国の意見や実情を尊重」してソーシャルワーク専門職のグローバル定義は2014年に公表されました。

★その前の2000年にIFSWで採択されたソーシャルワークの定義に書かれてあった「人と環境

の接点への介入」(エコロジカル・アプローチ)を「定義本文からは消滅」させ、「ミクロな個人の問題解決」から「マクロな社会変革・社会開発」を強調しています(社專協…2016年)。

★ソーシャルワークのグローバル定義は、「西洋の歴史的な科学的植民地主義と覇権」の是正を呼びかけています。

★開発途上国の貧困問題は、遅々としてその解決は進みません。また、社会的抑圧下にさらされ続け、5・6秒に一人の幼い命が消えている(ユニセフ) 現実を平気で無視できる「不正義」さが、わが国では、まかり通っています。

★本来普遍的であるべき「人権」が、自分の国の人だけに確保されればよしとする意識の「低さ」に、私たちソーシャルワーカーは、「挑戦」しなくてはなりません。

★「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」は、先進国、開発途上国、すべての国、世界において、社会正義が実現し、人権が保障されるために、ソーシャルワーカーのあるべき姿を定めたのです。

★このグローバル定義を「日本ソーシャルワーカー協会、日本社会福祉士会、日本医療社会福祉協会、日本精神保健福祉士協会」(社会福祉専門職団体協議会(社專協))も受け入れました。

★にもかかわらず、何も変わっていないのです。なかには、この定義が公表されて、「国際福祉分野」をどの程度社会福祉士養成のカリキュラムに取り入れているかなどのアンケートをとるなど、ト

ンチンカンなことをしている団体もありました。

★これは、国内的、国際的なある特定分野・領域の話ではなく、「社会正義と人権」というすべてのソーシャルワークに共通で、根源的、そしてその存在理由を規定する定義なのです。「それらがなければ、ソーシャルワークではない」とまでも言えるものなのです。

★私が、高校生・大学生の生徒さん、学生さんに向けて書くことと思つた動機もここにあります。ソーシャルワークのグローバル定義は、先進国の自国にだけ通用する「社会正義と人権」のお話ではありません。

★これからスクールソーシャルワークを勉強しようとする生徒・学生の皆さんは、この定義にもとづくソーシャルワーカーの「あるべき姿」から学習をスタートさせてもらいたいと思つています。

★従来の手垢にまみれ先進国だけに通用するソーシャルワークではなく、全世界に通用する（これが「スタンダード」であるべきものですが）、つまりグローバル定義にもとづくソーシャルワーカーの「あるべき姿」から出発してほしいと思つています。

★日本におけるスクールソーシャルワークは、S県での取り組みが最初とされています。なかでもY氏が、1983年にアメリカに渡り、スクールソーシャルワークを学び、帰国後の1986年より不登校の子どもたちを支援したということが先駆けらしいのです（1984年、アフリカのエチオピアで大飢饉が起きて100万人の犠牲者を出していたその頃です）。

★スクールソーシャルワーカーを志す生徒・学生のみなさんは、強い正義感、多様性尊重への柔軟性を持っているのではないかと思っています。

★将来スクールソーシャルワーカーを志すにあたって、生徒・学生のみなさんには、日本の子どもたちだけのことを考え、社会正義に鈍感で、人権の普遍性を否定するようなことがないようにしてもらいたいと思います。

★1日に1万人以上の子どもの命が消えている現状を見据えながら、先進国と開発途上国への一体的な実践ができるスクールソーシャルワーカーになってもらいたいと考え、ペンを取っています。

★一方、先進国、開発途上国、両者において、LGBTや発達障害を抱えながら、「それとはわからず」生きづらさ、合わせづらさ、違和感に悩み、疲れている人がいます。また、まわりに受け入れられていない状況にSOSも出せずに、必死に差別・排除されないように、ものすごく気を遣って、ひっそりと隣の席に座っている子がいるのです。

★LGBT、発達障害など、自らが理解し、周りに理解され、認められることが重要です。それは多様性が尊重されるということです。「多様性が大切にされる」ことです。

★多様性が尊重されると、誰もが学校や社会で、自分の気持ちや行動を隠し、あるいは押し殺す必要はありません。

★多様性が尊重され、大切にされる社会では、すべての人が、誰一人差別・排除されることなく、そ

の社会に包み込まれます。それを社会的包摂と言います。

★ソーシャルワークのグローバル定義の公表に先立つ15年も前の1989年11月20日に第44回国連総会で「児童の権利に関する条約」（児童の権利条約）が採択されています。

★同条約の前文には、「特に開発途上国における児童の生活条件を改善するために国際協力が重要であることを認めて」定められたと述べられています（わが国は1994年5月22日に発効）（傍線は著者）。

★日本におけるスクールソーシャルワークの研究や教科書では、「児童の権利条約」を根拠に日本の子どもの「権利」を主張していますが、このような開発途上国への国際協力についての引用は少なく、関心が薄いことが残念です。

★また、同条約において、第29条で「児童の教育」が指向すべきことが示されています。締約国は、以下のことに同意して批准しています。

人権及び基本的自由並びに国際連合憲章にうたう原則の尊重を育成すること。

つまり、どの国においても「児童の教育」は、「人権意識の向上や社会正義感の育成」を目指しているということです。これが児童教育の最上の目的なのです。

★また子どもが「権利の主体」として認められ、子どもが「自由に自己の意見を表明する権利」の確保が保障されました。大人は子どもの気持ちや意見を十分に聞き尊重することが求められています。

※最近、保育所や学童保育に預けられている子どもの声を聞く機会がありました。本音はどの児童も「早く家に帰りたい」、「家に帰ったときには、誰かが必ず家にいて「お帰り！」と言ってほしい」、「夏休みにはいきたくない」と表明しています。その声が尊重されることを望みます。

★「児童の権利条約」が前記のような内容を持つていながら、わが国のスクールソーシャルワークの領域（研究、教育、教科書、論文）では、開発途上国の子どもしたこと、子どもが自由に意見を表明する権利、「お帰り！」と言ってほしい」、「これらがほとんど無視され素通りされています。

★スクールソーシャルワークの研究者・実践者の人権感覚の希薄さは危惧されるところです。人権が限定的なもので、普遍的なものでないかのような感覚は「社会正義感の低さ」を示します。

★限定的な人権感覚や社会正義の低さは、スクールソーシャルワーク実践に対しての「社会的・構造的障壁そのもの」となりえるものかもしれません。

★スクールソーシャルワーク、またスクールソーシャルワーカーのめざすところは、他の実証諸科学とは異なり、自らが所属する学校を拠点に、その学校を通して、先進国や開発途上国、その両国の子どもたちの「人権及び基本的自由の尊重」（児童の権利条約）の育成、また「社会正義と人権」（ソーシャルワークのグローバル定義）の育成なのです。

★開発途上国も含めた「社会正義と人権」およびその実現のための学校を拠点とする実践において、問題意識や批判を持ってないようであれば、自国主義的（日本ファースト）でお粗末なスクールソ

シャルワーカーとなってしまおうでしょう。

問題意識

社会正義が「育成」されていない

★私は、三十数年来、大学で教えるかたわら、地域の高齢者や障害者、保育園や幼稚園の幼児、小中学校の児童・生徒やその保護者、先生の相談に応じてきました。

★そのような福祉の相談に長年にわたりかかわるなかで、私がスワールソーシャルワーカーについて書こうと思ったきっかけがいくつかあります。

★私が十数年前に担当した生徒と偶然市役所で出会いました。彼女は中学校時代の不登校を克服して公務員になって7年ぐらいが経っていました。まだ独身だと聞いたので、何気なく軽い気持ちで「今度時間のあるときでいいから、ぼくがやっているアフリカの障害児への支援活動を少し手伝ってよ」というと「先生、それどころじゃありませんよ。今は自分の生活だけでせいっぱいで、人のことまで構っている余裕はありません。ごめんなさい」というような返事だったように記憶しています。そのときに、私はかなりショックを受けたことを覚えています。そのショックとは、何年にもわたってかかわってきた生徒だったので「正義感のようなものがまったく育っていない」、「それを育成してこ